

かを確認してきた。次に、第二章の古代日本語における「アヲ」では、辞典の解説部分にあった古代日本語における「アヲ」について、佐竹昭広氏の説を中心に、また、それに関連して、「お」と「を」の合流について考えてきた。最後に、第三章では現代日本語の「青」について、現代日本語の「青」の特徴があるのか、ということについて考えてきた。

「青」の漢字の成り立ちや、「蒼」「碧」など「青」以外にも「あお」を表わす漢字があること、漢字の発祥の地である中国でのこれらの漢字の使い分け、五行説での「青」、「緑」の語源、小論の冒頭に挙げた色名ではない「青」についてなど、関連する諸問題に今回はあまり触れることができなかった。日本語の「青」と関わり深いこれらの不明瞭な点を今後の課題とし、小論を締めくくるところとする。

## 引用文献

- 1 『広辞苑 第六版』新村出 岩波書店 2008年 より引用
- 2 『日本国語大辞典 第二版 第一巻』小学館 2000年 より引用
- 3 『芥川龍之介全集 第一巻 羅生門 鼻』岩波書店 1995年 による
- 4 『三田村鳶魚全集』十一巻 中央公論社 1977年 による
- 5 『萬葉集拔書』「古代日本語における色名の性格」佐竹昭広 岩波書店 1980年 による
- 6 『土佐日記 新日本古典文学大系24』長谷川雅春 今西祐一郎 伊藤博 吉岡曠・校注 岩波書店 1989年 より引用
- 7 『改訂版 日本語要説』工藤浩 小林賢次 真田信治 鈴木泰 田中穂積 土岐哲 仁田義雄 畠弘巳 林史典 村木新次郎 山梨正明・著 ひつじ書房 2011年 参照
- 8 『日本語を考える』柴田武 博文館新社 1995年 参照

### 第三章 現代語の「青」

この章では、現代日本語の「青」について、どのような特徴があるのかをみていく。

現代日本語の「青」を考える上で、次の六つのような事実があることにまず着目したい。

- (1) アカの反対色はシロである・・・赤味噌・白味噌、赤組・白組、紅白饅頭
- (2) アカの反対色はアオである・・・赤鬼・青鬼、赤紫蘇・青紫蘇、赤信号・青信号
- (3) クロの反対色はシロである・・・黒目・白目、黒星・白星、素人・玄人
- (4) 以上の四色以外に言葉としての反対色をもつものはない。
- (5) 赤い、青い、白い、黒い、という形容詞の形をとることができるのはこの四色だけである。
- (6) 赤々と、青々と、白々と、黒々と、という形式の副詞があるのはこの四色だけである。

以上をみると、赤、青、白、黒の四色は現代の日本語でも特別な位置にあり、互いに密接な関連をもっていることがわかるだろう。

また、基本色が互いに複合するのは、「青黒い」「赤黒い」「青白い」だけで、「赤白い」は存在しない。これは、「青」と「黒」、「赤」と「黒」、「青」と「白」が直接対立しないことを意味している。つまり、

赤 — 青

白 — 黒

というような対立関係にあることがわかる。

さらに、「青」と「黒」については、現代語にはベアになるものがない当たらない。以上のことから、先ほどのものからさらに、

赤 — 青

白 — 黒

という図式が見えてくる。

他にも、音形からもこの四色の相互関係を見ることができると「あか」と「あお」は、どちらも「あ」で始まり、「しろ」と「くろ」はどちらも「ろ」で終わる。さらに、「か」と「お」（または「を」）は、いずれも広い母音の音節、「し」と「く」はいずれも狭い母音の音節である。また、四つとも二拍音であること、標準語ではアクセントも同じ頭高であることなどがあげられる。以上のことから、現代日本語の赤、青、白、黒は数ある色名の中でも、特別な位置にあると考えられている。<sup>8</sup>

また、現代日本語の「青」にも、古代日本語の「アヲ」がそうであったように、ほんやりとした色を表わす場合がある。たとえば、青ナマコや、青貝、青大将などの生物の名の例がある。

このうちで特にナマコは、「青」が「赤」と対照的に使われている例である。暗青緑色から黒色に近いものを「青ナマコ」赤褐色をしたものを「赤ナマコ」といい区別する。さらに青ナマコの中でも特に黒色に近いものを黒ナマコという。

一方、青貝は、ヤコウガイ・オウムガイ・アワビなど、貝殻の内側にある、真珠質の部分を螺鈿の材料に用いられる貝という場合と、ユキノカサ科の皿型の巻き貝の、背が青黒色で内側が乳青色をしているものという場合がある。

青大将は言うまでもなく、日本のほぼ全域に多く生息し背面が暗褐緑色をしている比較的大きな蛇である。

青ナマコのように黒色に近いような色から青貝のように乳白色に近い色、青大将のように緑色に近い色まで、これらの生物の有する「青」の色相は広く、暗青緑色や乳青色、暗褐緑色など、いわばはっきりと何色だと形容するのは難しい曖昧な色が含まれる。従って、これらの生物が「青」と呼ばれるのは、「青」がはっきりしない、ほんやりしたような曖昧な色を表わす語だからではないかと考えられる。

#### おわりに

これまで、第一章では、『広辞苑』と『日本国語大辞典』をもとに、現在広汎に通用する国語辞典には「青」はどのような説明がされているの

共に《暗》であり、シロは《白》であると共に《顕》の意も古い。アヲも、必ずしも《青》ではなく、もっと漠然とした状態にあったかも知れないことは、これがとかく「白」の意味領域に割り込みやすい傍ら、「黒」の方にも接近しやすい傾向を有する点から想像してみても良い。

△中略▽

アヲの原義が朦朧な《蒼白》といったあたりに落ちるものであったと再建してみるのである。これは明るい側からみて「ほの明るさ」、暗い側から見て「うす暗さ」、つまり「漠」の概念である。してみるとアカ《明》、クロ《暗》、シロ《顕》、アヲ《漠》は、色に関する用語ではなく、実は、「明―暗」「顕―漠」という二系列の用語で、それが色を表わすために転用されたものである。

ということであるらしい。

しかし、この説では、「青」は、明るい側からみて「ほの明るさ」、暗い側から見て「うす暗さ」ということから「漠」の字をあてているが、「明」「暗」「顕」にはそれぞれ「あかし」「くらし」「しろし」といった形容詞があるのに対し、「漠」を「あをし」と読んだ用例がないことから、「淡」で「あわし」のほうが適切ではないかとの意見もある。

アヲという語の発生は、「アヲ」という色を表わす語ではなく、ほんやりした、おぼろげな光の感覚を表わしたものだということがいえるだろう。

さて、ここまで、引用したもの以外、現代日本語の「青」は漢字で「青」または、ひらがなで「あお」と記し、古代日本語の「青」は「アヲ」と記してきた、あえて書き方を変えたのは古代日本語では「お」の音と「を」の音が違い、古代日本語の「青」は後者の音であるためである。なぜこのようなことが起こったのかという点、十一世紀頃に「お」と「を」が音の区別を失ったからである。

発音が同じ仮名は出てこないはずの「いろはうた」の中で、「お」と「を」は現代日本語では、発音の区別を失ってしまっている。○は「お」で表わすのに、助詞の場合に限って「を」を用いるのは、発音の区別が失われたこの二つの仮名を残し、「を」を助詞専用の仮名にすることで、

読み取りをより容易にするためである。では、この「お」と「を」の発音はいつ頃から、なぜその区別を失ったのであろうか。

十世紀末までは、「降る」は「oru」と発音されたので、「おる」と書かれ、「折る」のほうは、「woru」と発音されたので、「をる」というように書いた。つまり、「お」は○を、「を」はw○を表現したのである。ところが、十一世紀初頭の文献から、それまで「を」と書かれていた語に「お」を用い、「お」と書かれていた語に「を」を当ててくる例が出てくるようになる。もともと紛れやすかったア行の○とワ行のw○が、このあたりの時期に発音の区別が薄くなってきたと思われる。その後、どのような変化をたどったのかは不明だが、十六世紀末から十七世紀初頭に編纂されたとされるキリシタン資料では、o, s, sで書かれているところを見ると、○がw○に吸収される形になったのではないかと推測される。

古代日本語では、母音音節は語頭以外に存在しないというのが原則であるから、○の現れる位置は語頭に限られる。一方のw○にはそうした制約はないが、この音を含む語は必ずしも多いとはいえない。w○に始まる語は○に始まる語に比べて少なく、語頭以外のw○も「あを(青)」「いを(魚)」「とを(十)」「かをる(薫)」「しをる(萎)」などで、数は少ない。「降る」と「折る」のような、○とw○で区別されていた語もあるが、発音の区別がなくなったことで混乱を生じるといったことは、非常に稀であったのではないかと思われる。要するに、○とw○は、語と語の違いを示すのにあまり大きな役割をもっていなかったのではないかと考えられる。<sup>7</sup>

ここまで古代日本語のアヲをみてきた。古代日本語の「アヲ」は、色を表わす語ではなく光の感覚を表した語であったため、辞典にもあつた通り、青色だけではなく、緑色や紫色、灰色などの広い色相を表した語であった。そして、青を「アヲ」というのは、古代日本語では「お」の音と「を」の音が違い、古代日本語の「青」は後者の音であるためである。次項からは、現代語の「青」はどのようなものかを見ていく。

## 日本語の「青」について

③(未熟な果実などは青色をしているところから)人格、技術、学問などが未熟である。また、遊芸の道でやほである。語誌①②について、顔色について用いられるのは、「大鏡」の例のように顔色を失う場合と、「宇津保」の例などのように、体調がすぐれず痩せ衰えた状態を表わす場合とがある。(2)「未熟」の意味で用いられるのは室町時代後期くらい例しか見あたらないが、複合語構成要素の「あをく」という形では、「あをびれ男」「狭衣」(「青侍」「今昔」など平安時代にまでさかのぼる例が認められる。↓「あお(青)」の語誌。

とある。①の解説は『広辞苑』の①・②にあたる。②の解説は③。③は④にあたる。

ここまで、国語辞典では「青」はどのように説明されているのかをみてきたが、わかりやすくまとめると、『広辞苑』、『日本国語大辞典』ともに、「あお」とは、

1. 晴れた空のような色をさす。
  2. 木の実などがまだ熟していない状態を表わす。
  3. (人に対して)年が若いこと、また、技術や人柄が未熟である。
  4. 青信号や青本、青銭などの略として使われる。
  5. 特に緑とは重なり部分が多く、緑色をしたものを「青」と表現する例が多い。
  6. 古くは青・緑・紫、さらに黒・白・灰色も含んだ。
  7. アカ、シロ、クロと並び、日本語固有の基本的な色彩語である。
- さらに、「あおじ」は、
1. 青い色をしている。
  2. 顔に血の気がない
  3. (果実などの未熟なものは青いことから)技術や人柄などが未熟である。

ということを表わす語であるということがいえるだろう。

いずれにせよ、含まれる意味が多すぎて、日本語を学習している外国人などがみれば混乱しそうな解説である。

次章からは、佐竹昭広氏の色名の研究を中心に古代日本語のアヲにつ

いて見ていく。

## 第二章 古代日本語における「アヲ」

佐竹昭広氏に次のような考察があるので紹介しておく。同氏の「古代日本語における色名の性格」(『萬葉集抜書』岩波書店 1986年)<sup>5</sup>によると、古代日本語には、色彩を表示する抽象語として、アカ・アヲ・シロ・クロの四種の色名しか認められないという。

八世紀に成立した古事記においては、アカ、アヲ、シロ、クロの四種の色しかなかったというが、土佐日記が成立したとされる十世紀前半になると、五色といった観念が出てくるという。土佐日記(『新日本古典文学大系』岩波書店 1989年)には、都から離れて土佐国へ赴き、任を終えてから都に向かう船旅のシーン。二月一日の条で、大阪府にある和泉の灘を出たところで、

黒崎の松原を經て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足らぬ。

(土佐日記・二月一日)。

という場面がある。ここで、五色といった観念が出てくる。五色とは、青、黄、赤、白、黒をさす。この一節では黒は黒崎(地名)、青は松、白は波、「蘇芳」は染色の名だが、今昔物語集(二十七―十)などには「蘇芳色ナル血」という例もあることから、蘇芳はつまり赤であり、この一節では貝がそれにあたる。ここで五色に足りない一色は「黄」である。しかし、土佐日記以前の資料には「黄」はほとんど見られないことから、「黄」という色の観念は渡来のものであり、古来日本人のパレットには、アカ、アヲ、シロ、クロの四色しかなかったという。

しかも、その四色も、もとは色ではなく光の感覚を色に転用したものであるという。佐竹氏前掲書によると、

形容詞アカシは、拾遺集卷九雑下にある問答歌にも題材となつているように、

「白妙の白き月をも紅の色をもなかあかしといふらむ」(五一八)

で、『赤』であるとともに『明』でもある。クロは『黒』であると

いての説明を行っているところなのだが、会話の中で、人形には男と女があり、男には、青頭や老僧などがあり、女には、朝日や、照日、悪婆などがある、その中でもっとも有名なのは、青頭である、と説明している。

また、三田村鳶魚氏の「野呂松人形」<sup>4</sup>に、式亭三馬「泥沼野呂松狂言」を引用して、「其むかし江戸和泉大夫が芝居に、野呂松勘兵衛といふもの有、頭平に色青黒くして、其さまいやしげなる人形をつくり、是をのろま人形といふ」とあり、青黒い頭の人形であるらしい。

これらのことから推測するに、のろま人形で代表的なものといえは青黒い頭をした青頭という人形で、その色などから青というようになったのではないだろうか。

⑦のうなぎを青と呼ぶというのは、生物学的にそういった種類のうなぎがいるわけではなく、背の色が少しくすんだ緑色をしているうなぎを「青うなぎ」といい、昔から良質なうなぎの代名詞とされてきたようである。

⑩の八百屋を青と呼ぶのは、野菜類を「青物」といい、また、それを売っている店を「青物屋」ということからきているのだらうと思われる。⑪のたくあんや大根の漬物を青と呼ぶというのは、例が見当たらなかつたため、真偽のほどは定かではない。

では、続きはなんと書いてあるかというところ、

②〔接頭〕①木の実などが、十分に熟していないことを表わす。「青びょうたん」「青ほおずき」など。②年が若く十分に成長していないこと、人柄、技能などが未熟であることを表わす。「青二才」「青侍（あおざむらい）」「青女房（あおにようぼう）」「青道心」など。

語誌(1)アカ・クロ・シロと並び、日本語の基本的な色彩語であり、上代から色名として用いられた。アヲの示す色相は広く、青・緑・紫、さらに黒・白・灰色も含んだ。古くはシロ（頭）⇔アヲ（漢）と対立し、ほのかな光の感覚を示し、「白雲・青雲」の対など無彩色（灰色）を表現するのは、そのためである。また、アカ（熟）⇔アヲ（未熟）と対立し、未成熟状態を示す。名詞の上に付けて未熟・幼少を示すことがあるのは、若菜などの「色」を指すことからの転義ではなく、その状態自体をアヲで表現したものととも考えられる。(2)色名として

のアヲは、ミドリ（これも若やいだ状態を表わす意が早い）が緑色（グリーン）の色名として定着するにつれ、狭く青色（ブルー）を示すようになるが、なお、ブルー以外の色にも使われ続けている。

語源説(1)アフグ（仰）から。空の色を見ることと関連させる。（日本釈名・和語私蔵鈔・紫門和語類集・国語の語根とその分類Ⅱ大島正健）。(2)アヲ（天居）の義〔言元梯〕。(3)アキイロ（藍色）の義〔日本語源学Ⅱ林龜臣〕。(4)アハ（淡）、アハ（泡）などの説があるが、アヲカ（明）の義〔日本語源Ⅱ賀茂百樹〕。(5)アサイロ（浅色）の反〔名語記〕。(6)アカヲチ（明遠）の反〔名言通〕。

とある。〔接頭〕にある、①木の実などが、十分に熟していないことを表わす、②年が若く十分に成長していないこと、人柄、技能などが未熟であることを表わす、という説明は、『広辞苑』の⑧の解説と同じであるといえる。

また、「語誌」の(1)に見える、①の「本来は、黒と白との中間の範囲を示す広い色名で、主に青、緑、藍をさし、時には、黒、白をもさした。」という解説は、『広辞苑』と同じく佐竹昭広氏の考えに基づいたものである。

さらに、(1)で、「白雲・青雲」を例に無彩色（灰色）を表現するとある。「青雲」という表現は「白雲」ほど一般的な表現ではないが、『広辞苑』によると「青雲」（ちなみに、「あおくも」「あおくも」とよむ）とは、あおくも【青雲】淡青色や淡灰色の雲。一説に、青空を雲に見立てていう語。

とある。また、「しろ（白）」「出づ」にかかる枕詞でもある。淡青色や淡灰色の雲とあるが、万葉集卷一六の三八三番歌に「弥彦おのれ神さび青雲（あをくも）のたなびく日すら小雨そほ降る」（作者未詳）とあるので、入道雲などを連想させるような白い色をした雲ではなく、曇り空や雨雲のような、少し暗い雲のことを表わすと推測される。

念のため『広辞苑』と同じように「青い」も引用しておく、あお・い【青】〔形口〕文あを・し〔形ク〕①（本来は、黒と白との中間の広い色で、おもに青、緑、藍をさす）青い色をしている。青の色である。↓青（あお）。②顔色が青ざめている。血の気がない。

## 日本語の「青」について

立たぬ色を表す語で、灰色をも含めていった)①青色である。緑・藍・蒼・碧に通じていう。記上「鴟鳥そとりののーき御衣みけしを」。「ーき空」。「ーい海」。「ーい野菜」②青白い。宇津保後藤「鞍置きたるーき馬出で来てをどりありきていななく」。「ーい月影」③顔に血の気がない。大鏡御「くやくしく思すに御色もーくなりてぞおはしける」。「顔がーくなる」④(果実などの未熟なものが青いところから)人柄や、することが未熟である。日葡「アライコトヲイウ」。「考えがまだーい」◇一般には「青」。くすんだあお色や血の気がないあお色には「蒼」、浅緑から濃青緑色では「碧」も使う。とある。①と②の解説は、緑色や他の色も含まれているが、色をさしていることがわかる。③と④は色ではない青の使い方だが、③の血の気がないという解説は「あお」の項目にはなかったことから、血の気がない様子は「あおい」でしか表現されないようである。「広辞苑」よりも専門的で、日本語の国語辞典としては唯一の大辞典である『日本国語大辞典』<sup>2</sup>も引用してみる。

あおアヲ【青】①【名】①色の名。五色の一つ。七色の一つ。三原色の一つ。本来は、黒と白との中間の範囲を示す広い色名で、主に青、緑、藍をさし、時には、黒、白をもさした。「青空」「青海」「青菜」などと他の語と複合して用いることが多い。②植物の葉の青々とした様子。③馬の毛色が青みがかかった黒色であること。また、その馬。青毛。青毛の馬。④青本のこと。草双紙の類をさす。⑤青銭のこと。寛永銭をさす。⑥野呂松(のろま)人形の中で、主要な役に使われる人形。頭は平らで、顔の色は青く、一座の主要な人形遣いがつかう。よろく。⑦うなぎの一形態。背色の少し青みがかかったものをいう。うなぎ食いの通(つう)の言葉。⑧カルタ用語。①天正ガルト四八枚のうち、ハウ(棍棒)の札一二枚をいう。その凶の棍棒に青色の彩色が施してあることからいう。青札。⑨「あおたん(青短)」の略。⑩「あおしんごう(青信号)」「あおでんしゃ(青電車)」などの略。⑪やお屋をいう、露店商人などの隠語。⑫たくあんや大根の漬物をいう、てきや、盗人仲間などの隠語。

とある。①の解説は、『広辞苑』では、「古代日本語では、固有の色名と

しては、アカ・クロ・シロ・アオがあるのみで、それは明・暗・顕・漠を原義とするという。本来は灰色がかかった白色を言うらしい」としているのに対し、『日本国語大辞典』では、「本来は、黒と白との中間の範囲を示す広い色名で、主に青、緑、藍をさし、時には、黒、白をもさした」と、灰色だけでなく黒や白も含まれており、『広辞苑』よりも『日本国語大辞典』のほうがアヲの示す色相が広く、この二つの辞書の理解にはかなり開きがあるように感じられる。

他の解説もみていくと、③の解説は『広辞苑』の④と、④の解説は⑤と、⑤の解説は⑥と、⑧の解説は⑦と、⑨の解説は「あおでんしゃ(青電車)」が加わっているが、『広辞苑』の③の解説と、それぞれ同じ、または、近いことが書かれている。

②の「植物の葉の青々とした様子」と、⑥の「野呂松(のろま)人形の中で、主要な役に使われる人形」、⑦の「うなぎの一形態。背色の少し青みがかかったものをいう」、⑩の「やお屋をいう、露店商人などの隠語」、⑪の「たくあんや大根の漬物をいう、てきや、盗人仲間などの隠語」は、『広辞苑』にはなかった解説だ。②は、確かに山や竹などの緑を青という。⑥ののろま人形は、調べてみると白い顔をした人形が多いが、その中に黒に近い色の顔をした人形があり、その人形が⑥の説明の人形だと思われる。芥川龍之介の作品の中にも「野呂松人形」<sup>3</sup>という随筆がある。あらずじは、招待を受けた芥川が、友人Kと共に会場に行つてのろま人形の劇を見る。人形劇の退屈さを通して、自分たちが書いている小説もいつか色あせて退屈なものになるのだろうかと思いをめぐらすというものである。そのなかに、

「人形には、男と女があつてね、男には、青頭とか、文字兵衛とか、十内とか、老僧とか云うのがある。」Kは弁じて倦まない。

「女にもいろいろありますか。」と英吉利人が云つた。

「女には、朝日とか、照日とかね、それからおきね、悪婆あくばなんぞと云うのもあるそうだ。もつとも中で有名なものは、青頭でね。これは、元祖から、今の宗家へ伝来したのだと云うが……」

という会話が出てくる。これは、芥川と一緒に人形劇を見に行った友人Kが、芥川と、たまたま近くにいた袴姿のイギリス人へのろま人形につ

# 日本語の「青」について

片岡 ゆみえ

(山崎ゼミ)

## はじめに

「青々した緑」という言葉がある。この表現に疑問を抱く人も決して少なくはないだろう。もちろん、この言葉が表しているのは、青色ではなく緑色なのだが、なぜ緑色を「青々」というのだろうか。

「青」という語は、空や海など青色をしたものに使われるが、一方で、青葉や青虫、青海苔など、青ではなく緑色をしたものにも使われている。それは、「青」という語が大きく分けて三つの意味があるからではないかと考えられる。一つ目は、青空、青鉛筆などのように、色名としてのもの。二つ目は青葉や青虫などのように、緑が青といわれる例。そして三つ目は青女房、青二才などのように、色ではない青である。

この論文では、『広辞苑』や『日本国語大辞典』などを使い、現在の国語の辞典ではなんと解説されているのかを、そして、佐竹昭広氏の論文「古代日本語における色名の性格」などを使い「青」という語の語源を、小松英雄氏の『日本語の歴史―青信号はなぜアオなのか―』（笠間書院2001年）や柴田武氏の『日本語を考える』（博文館新社1995年）などを参考に現代の日本語の青の特徴を考えていく。

なお、本稿では、現代の日本語における青を示すときは「青」または「アオ」、古代の日本語における青を示すときは「アヲ」、色としての青を示すときは「青色」と表記する。

また、「日本語」の青を探るのが本稿の目的であるため、青という漢字そのものの歴史や成り立ちなどについては触れないこととする。

## 第一章 「青」とは

まず、見当をつけるため、共通の認識を確かめるために、『広辞苑』<sup>1</sup>から「アオ」の項を引用してみると

アオ **【青】**（一説に、古代日本語では、固有の色名としては、アカ・クロ・シロ・アオがあるのみで、それは明・暗・顕・漠を原義とするという。本来は灰色がかった白色を言うらしい）①七色の一。三原色の一。晴れた空のような色。「空の―、海の一」②緑色。「―田」③青信号の略。④青毛の略。俗に、馬一般の代表名としても用いる。⑤青本の略。⑥青銭の略。⑦⑦天正カルタの青札の略。⑧花札の青札の略。⑧ある語に冠して「若い」「未熟の」の意を表す語。「―才」「―くさい」↓青い

とある。①の説明は色名としての青、②と③は緑を青という例。④・⑤・⑥・⑦は今でいう青色や緑色とは違うかも知れないが、おそらく、色が他のものと比べ「青みがかって」見えるもの、または、赤など対になるものがあるのだろうと推測される。⑧は、色ではなく状態などを青という例だろう。

カッコ内の「一説に」から「く」を原義とするという」までの説明は、佐竹昭広氏「古代日本語における色名の性格」（『萬葉集抜書』岩波書店1980年）に基づくものだろう。この説に関しては、また後ほど述べることにするが、しかし、佐竹氏はアヲの原義を「朦朧な《蒼白》」と言っているのので、「本来は」以下の解説部分は別の一説であろうと思われる。解説の最後に矢印で「青い」とあるので「青い」も引用しておく。

アオ・いアヲ **【青い・蒼い】**《形》文 あを・し（ク）（古くは、目